

2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告 (第 4 報) —卒業前の進路決定状況と大学院進学に対する認識を中心とした速報—

神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・熊谷龍一・甲斐健人・小嶋秀樹
東北大学大学院教育学研究科

要約

本研究は、2022 年度(令和 4 年度)入学生から始まった新たな学部専門教育課程のありかたを検討するため、卒業を控えた新カリキュラム 1 期生(4 年生)を対象に、進路決定状況と大学院進学に対する認識について明らかにすることを目的とした。2026 年 1 月下旬にオンライン調査を実施し、53 名(回収率 70.7%)から回答が得られた。主な結果は以下の通り。卒業を控えて、研究室の所属感や、学生生活の満足度、教育学部での学びは前年度までに比して増加しており、4 年間の振り返りも春からの進路に対してもポジティブな感情価が高かった。進路選択状況については、大学院進学 14 名、公務員(教員含む) 12 名、民間企業就職 24 名、その他 3 名と民間企業就職が高かった。一方で、最終的には大学院に進学しない進路を選んだとしても在学中に進学を検討したことがある者は少なくないこと、進路決定は在学 4 年間に多様な選択肢の中から吟味された結果として行われていること、さらに非進学者でも 25%超が将来的には大学院に進学する可能性があることが示された。

キーワード: カリキュラム, 教育学, 進路選択, 学部教育, 大学院進学

【背景と目的】

2022 年度入学生から始まった東北大学教育学部の新カリキュラムについて、これまで、コース意思決定を行った 1 年次終了時(神谷・後藤・佐藤・小嶋・野口,2023)、指導教員決定を行った 2 年次終了時における希望進路等(神谷・後藤・佐藤・若島・小嶋・野口,2024)、さらに指導教員の下で指導が始まって 1 年ほどたった 3 年次終了時(神谷・後藤・佐藤・若島・甲斐・小嶋, 2025)において新カリキュラムに関するアンケートの結果について報告してきた。3 年次の報告を行った前報(神谷ほか, 2025)では、2 年次に比して、卒業後の進路が絞り込められていること、その結果大学院進学、公務員、民間企業就職の割合が概ね 1/3 ずつになっていること、一方で、進路決定に関する活動状況については、進路を一つに絞りつつも、多様な活動を行っている可能性も示唆されていた。

本報においては、2022 年に開始された新カリキュラムの第 1 期生である学生が卒業を控える時期において、進路決定をどのように行ってきたのか、特に、本カリキュラム改革が学部からの大学院進学者の増加をねらったものであったことから(神谷ほ

か、2023)、大学院に進学しない者も含めて、「大学院進学」に対する認識を中心に質問項目を設定し、進路ごとの決定状況と大学院進学に対する認識について報告することを目的とする。なお、本報告は本企画研究を年度内で報告する必要から、データ収集開始からおよそ 2 週間でのデータをもとに速報として報告を行うものである。

【方法】

4 年次の卒業を控えた時点において、2022 年度入学新カリキュラム 1 期生を対象にアンケート調査を行った。アンケートは Google Forms で作成され、フォームの冒頭に調査の趣旨と、2022 年度入学生の new カリキュラム 1 期生を対象とした追跡調査であることを踏まえて協力依頼が説明されるとともに、協力は任意であること、入力にあたってはメールアドレスが収集されること、そのメールアドレスは追跡調査のデータ連結のためだけに使用され、分析担当者以外は目にしないこと、分析にあたってはメールアドレスが削除されたものを分析に使用し、統計的に処理するとともに、自由記述欄のコメントも誰のものかわからないものとして処理すること、などが明記された。

調査依頼については、2026 年 1 月 14 日の夕刻に、1 月 30 日を一端の締め切りとして対象となる学生にアンケート協力依頼のメールを一斉に配信するとともに、学部の掲示板や SNS で協力を呼び掛けた。その後、3 度にわたるリマインドメールを送信し、同月 30 日 18 時時点でのデータを今回の分析対象とした。調査対象となった 2022 年度入学の学部 4 年生の在籍人数は 75 名であり、そのうち 53 名から協力が得られた（回収率 70.7%；教育学コース 20 名，教育心理学コース 33 名）。なお、協力が得られた学生の中に、転コースしたことがある者，研究室に所属していない者はいなかった。指導教員を変更したものは 1 名であった。

4 年次の具体的な調査項目は以下の通り。

Q1：現在所属するコース：教育学コースと教育心理学コースの 2 択で尋ねた。

Q1-2：在学中の転コースの経験の有無について、「転コースをした」「転コースはしていない」の 2 択で尋ねた。

Q2-1：現在の研究室所属（指導教員の決定状況）：留学，休学，習得単位不足等の理由で 4 年次終了時においても研究室所属（指導教員）が決定していない学生もいる可能性があることから，調査時点で指導教員が決定しているかどうかを尋ねた。また，Q2-2 として，所属する研究室に対する所属意識(研究室所属意識)を尋ねた。選択肢も「そう思う(5)」から「そう思わない(1)」の 5 件法であった。さらに，Q2-3 において卒業までに指導教員を変更したかどうかについて「変更した」「変更していない」の 2 択で尋ねた。

Q3：4 年次の終わりに在学期間 4 年間で振り返ったときの気分：1 年次に指導教員決

定について考えた時の気分，2,3 年次に次学年に進級するにあたっての気分を尋ねたことを踏まえて，4 年次では「現在，4 年目も終わりを迎えて，多くの方が卒業を控えていると思います。これまでの東北大学での学生生活について考えた時，今あなたはどのような気持ちですか」と，4 年間を振り返ったときの気分を尋ねた。「非常にあてはまる(6)」から「ほとんどあてはまらない(1)」の 6 件法で回答してもらった。この感情価の測定については，一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）の 24 項目のうち，3 つの下位尺度（肯定的感情，否定的感情，安静状態）から 4 項目ずつ採用し，12 項目尋ねた。分析に際しては下位尺度ごとに平均値を算出した。内的整合性は，肯定的感情で $\alpha = .86$ ，否定的感情で $\alpha = .92$ ，安静状態で $\alpha = .91$ であった。

Q4：在学中に検討していた卒業後の進路（複数回答）

多くの学生が卒業を控えた段階において，4 年間の在学中に検討したことのある進路について尋ねた。「その他」を含めた 2，3 年次で用いた 9 項目から「まだ決まっていない」「まだ考えられない」を除き，新たに「卒業しない選択肢」「検討準備なし」を加えた。これらの項目について，あてはまるものすべてを選んでもらった。具体的な項目は Figure1 を参照のこと。

Q5：在学中の進路準備・活動状況（複数回答）

さらに在学中に行った卒業後の進路に関する準備・活動状況について 20 項目を準備し，あてはまるものすべてを選んでもらった。神谷ほか(2025)で尋ねた 3 年次末の進路決定のための活動状況の項目に，大学院進学のための相談に関する 4 項目と「特に何もしていない」を加えた（項目は Figure2 参照）。

Q6：春からの進路を考えたときの気分：Q3において 4 年間を振り返ったときの気分を尋ねていたが，3 年次までの気分に関する質問はすべて，将来に向けての未来志向的な気分であったことを踏まえて，春からの進路を考えたときの気分として「この春（4 月以降）からのご自身の進路等について考えた時，今あなたはどのような気持ちですか」と尋ねた。項目，選択肢と回答の処理方法は Q3 と同様である。内的整合性は，肯定的感情で $\alpha = .95$ ，否定的感情で $\alpha = .87$ ，安静状態で $\alpha = .94$ であった。

Q7：大学院進学に対する認識

どのような進路を選んだにせよ，大学院への進学についてどのような思いを抱いているかをとらえるためにすべての協力者を対象とした大学院進学に対する認識を尋ねた。具体的には，「以下は，大学院進学を考える際の判断に関する項目です。あなたご自身の実際の進路とは別に，あなたの進路として大学院進学という選択肢を考えた際に，これらの項目について，現在のあなたの自身はどのように思いますか」と教示し，12 項目を設定した（項目は Figure3 参照，ただし表記は一部簡略化されている。以下「簡略化済」と表記する）。個々の項目について「非常にそう思う」(6)から「ほとんどそう思わない」(1)の 6 件法で尋ねた。

Q8：東北大学大学院教育学研究科の印象

さらに、母校への内部進学ということに関して、大学院教育学研究科の印象について「東北大学大学院教育学研究科という大学院について、現時点の印象としてどのように感じていますか。あなたの実際の進路とは別に、以下の項目それぞれについて最もあてはまるものを1つ答えてください」と教示し、12項目項目を設定した（項目はFigure4参照、簡略化済）。個々の項目について「非常にそう思う」(6)から「ほとんどそう思わない」(1)の6件法で尋ねた。

Q9：現時点での卒業後の進路（単一回答）

調査時点での卒業後の進路について、「現時点であなた自身のこの春以降の進路は以下のうちどれですか？」と尋ねた。選択肢は、3年次の卒業後の進路（単一回答）で尋ねた9項目から「まだ決まっていない」「まだ考えられない」を除き、新たに、「現在、就職活動中」「大学院以外の教育機関（他大学、専門学校等）への進学（予定含む）」（他大学等進学）「卒業はするが、具体的な活動は考えていない」（卒業後の活動は未定）「海外渡航（海外留学含む）」「留年あるいは休学」の5項目を加えた12項目から最もあてはまるものを1つ選んでもらった。

Q10～Q15：分岐質問

さらに、Q9で選んでもらった春以降の進路について、「東北大学大学院教育学研究科」を選んだ場合（以下、内部進学者）、「他大学・他研究科進学」を選んだ場合（以下、他院進学者）、民間就職などそれ以外の進路を選択したもの（非進学者）の3群に分類し、進路ごとに枝分かれ質問を準備した。

内部進学者には、Q10「内部進学を選んだ理由」として7項目、Q11「内部進学で迷いが生じた点」として6項目（項目は順にFigure6,7参照、6のみ簡略化済）を、他院進学者には、Q12「進学先として東北大教育を選ばなかった理由」6項目、Q13「他大学院・他研究科を選んだ理由」9項目、非進学者には、Q14「進学しない理由」10項目を尋ねた（Q14の項目はFigure8参照、簡略化済）。いずれも、上記の項目の他に、「項目以外の理由がある場合には自由記述で回答するようにした。選択肢は「あてはまる」(5)から「あてはまらない」(1)の5件法で尋ねた。さらに非進学者に対しては、Q15において将来の大学院進学の可能性について「非常に低い」(1)から「非常に高い」(5)までの5件法で尋ね、「どちらかといえば高い」(4)ならびに「非常に高い」(5)を選択した回答者には、続けて「進学に必要な条件」を8項目設定（項目はFigure9参照、簡略化済）し、「あてはまる」(5)から「あてはまらない」(1)の5件法で尋ねた。

Q16-18：学生生活の振り返りと将来の夢

上記の枝分かれ質問の後、再度全員が回答する項目として、3年次までと同様のQ16「現時点での大学生活全体の満足度」ならびにQ17「現時点での東北大学教育学部での学びの満足度」を尋ねた。いずれも「大変満足している」(5)から「まったく満足

していない(1)」の5件法で回答してもらった。そしてQ18において、「最後に、あなたの将来の夢を聞かせて下さい」と尋ね、自由記述で回答してもらった。

【結果と考察】

まず、Q2 研究室所属感についてみると (Table1), 「3.今でも現在所属する研究室でよかったのか悩んでいる」, 「4.現在所属する研究室には自分の居場所があると感じている」の2つ以外はいずれも、「そう思う」「ややそう思う」で90%を超えており、先の2項目も70%を超えていたことから概ね所属する研究室に対する所属感は得られていることがうかがえるが、1名きわめて否定的な回答をしたものもいた。

Table1 研究室所属感

	そう 思わない	あまりそう 思わない	どちらとも いえない	やや そう思う	そう 思う
1.現在所属する研究室を選んでよかったと思っている。	1	1	1	12	38
2.現在の指導教員の下で研究を進められて楽しかった。	1	0	3	13	36
3.今でも現在所属する研究室でよかったのか悩んでいる。	21	20	4	6	2
4.現在所属する研究室には自分の居場所があると感じている。	1	5	8	21	18
5.現在所属する研究室での学びで自分が成長できそうだと感じている。	1	0	3	23	26

N = 53

次に4年間の学生生活を振り返った時の気分(Q3), ならびに春からの進路を考えたときの気分(Q6)について、肯定的感情、否定的感情、安静状態の平均値をTable2に示す。また、参考値として神谷ほか(2025)で報告した1, 2年次の縦断データ(N=51)の値と3年次のデータも示す。ただし、本報告の4年次データはこれら前年度までのデータとすべての個票が対応しているわけではない点に留意が必要であり、またそのため平均値の差の検定は行っていない。4年間の振り返りの値を見るとこれまでの結果に比しても、肯定的感情と安静状態が最も高く、否定的感情が最も低いことが見て取れる。アンケートに回答したものは、学生生活を前向きに過ごし、4年間に肯定的に感じていることがうかがえる。しかしながら、春からの進路についての感情価は、肯定的感情も非常に高いものの、安静状態で最も低く、新しい生活を控えて落ち着かない思いも抱えていることがうかがえている。

Q4の卒業後の進路として在学中に検討したこと(複数回答)について、Figure1に

Table2 4年次までの年度末におけるさまざまな感情価

		4年次新生活 ⁵⁾	4年次学生 ⁴⁾	3年次 ³⁾	2年次 ²⁾	1年次 ¹⁾
肯定的感情	平均値	4.74	4.87	4.33	4.80	4.13
	SD	(1.09)	(0.77)	(1.17)	(0.90)	(0.73)
否定的感情	平均値	3.50	2.85	3.66	3.49	4.05
	SD	(1.10)	(1.09)	(1.11)	(0.90)	(0.95)
安静状態	平均値	3.28	4.28	3.36	3.44	3.35
	SD	(1.05)	(1.10)	(1.10)	(0.90)	(0.97)
			N=53	N=51	N=51 ⁶⁾	N=51 ⁶⁾

1) 指導教員決定について考えた際の感情(1年次)

2) 3年次進級について考えたときの感情(2年次)

3) 4年次進級について考えたときの感情(3年次)

4) 4年間の学生生活を振り返ったときの感情(4年次)

5) 春からの進路を考えた時の感情(4年次)

6) 神谷ほか(2024)で報告された1, 2年次連結データに基づくためN=51となっている。

示す。これも参考値として2年次と3年次の数値(N=57, 51)を示すが、データは必ずしも対応してはいない。また、準備した選択肢について、2, 3年次は「(回答時に)検討している進路」今回(4年次)は、「在学中(4年間に)検討した進路」である点に留意は必要である。その意味では、4年次の数値は2, 3年次の度数よりも大きくなるはずであるが、回答者が一致していないこと、また、自分が検討した(と回答した)ことを失念していることなどから、「中学・高校の教諭」のように2年次の半数以下に

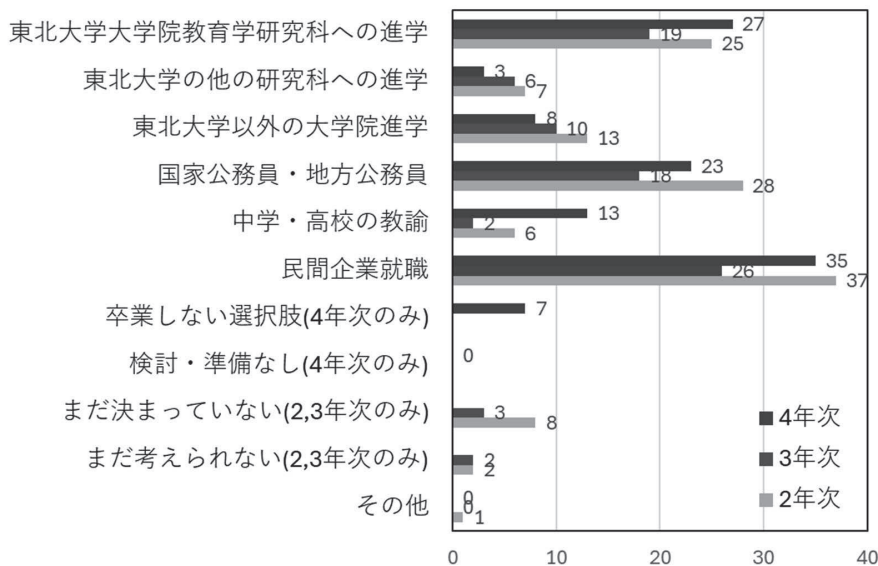


Figure1 在学中に検討した卒業後の進路

なっているところもある。全体としては、概ね、大学院進学、公務員、民間企業就職と 1/3 ずつであり、概ね本学部の進路実績と同様であった。また、大学院進学については、他研究科、他大学院が年次を追って減少傾向にあり、年次進行に伴って本研究科へ進学か、他の進路へと切り替えている様子が見えてくる。

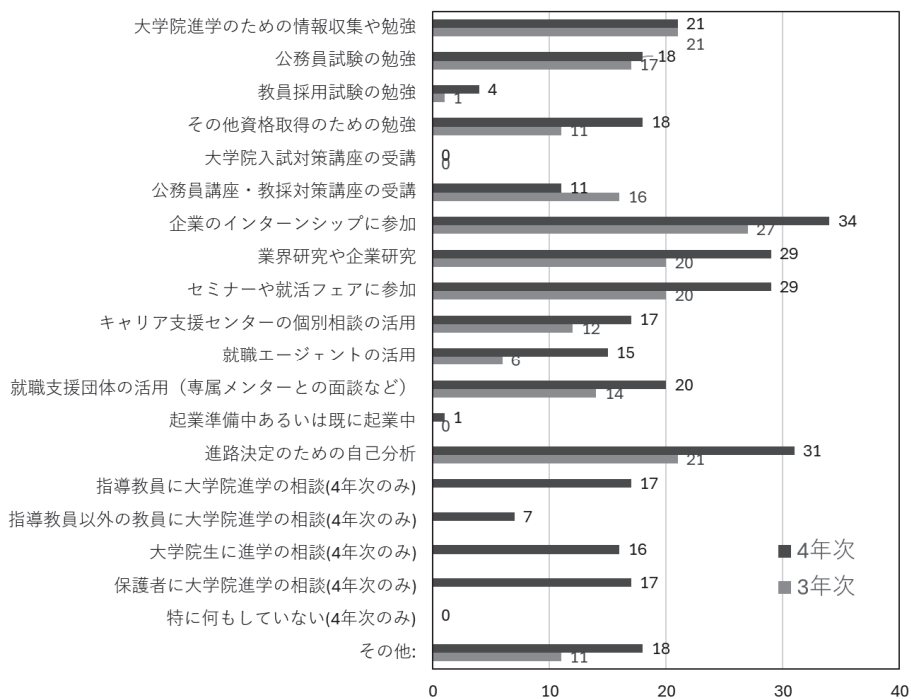


Figure2 進路決定に関する活動として在学中に行ったこと

Q5 では、卒業後の進路決定に関する活動として在学中に行ったことを尋ねたところ、「企業のインターンシップに参加」が 34 名と最も多く、ついで「進路選択のための自己分析」が 30 名であった。全体的に 4 年生になって就職活動の追い込みの中で、「業界研究や企業研究」「セミナーや就活フェアに参加」などの増加が目立つ。また、大学院の進学についても、周囲の人に相談をしながら検討をしていることがうかがえている（Figure2）。

Q7 では、大学院進学に対する認識を尋ねた。「ややそう思う」以上のポジティブな回答の割合の高い項目を見てみると「専門性を深めたいと思う」という回答が 90.6% と最も高く、次いで「研究に自信がない／負担が大きいと感じる」83.0% を挟んだのち、「研究（卒業論文等）を継続・発展させたいと思う」79.2%、「学び直し・探究を続けたい（知的関心が強い）と思う」79.2%、と学びに対する積極性が示された。しかし、さらに、「経済的負担が大きい」75.5%、「早く働いて収入を得たいと思う」71.7%、

など大学院進学の問題も認識されているようであった。加えて、「大学院に関する情報が不足していると思う」との回答も 66.0%あり、在学中の大学院に関する情報提供の重要性も浮かび上がったといえよう (Figure3)。

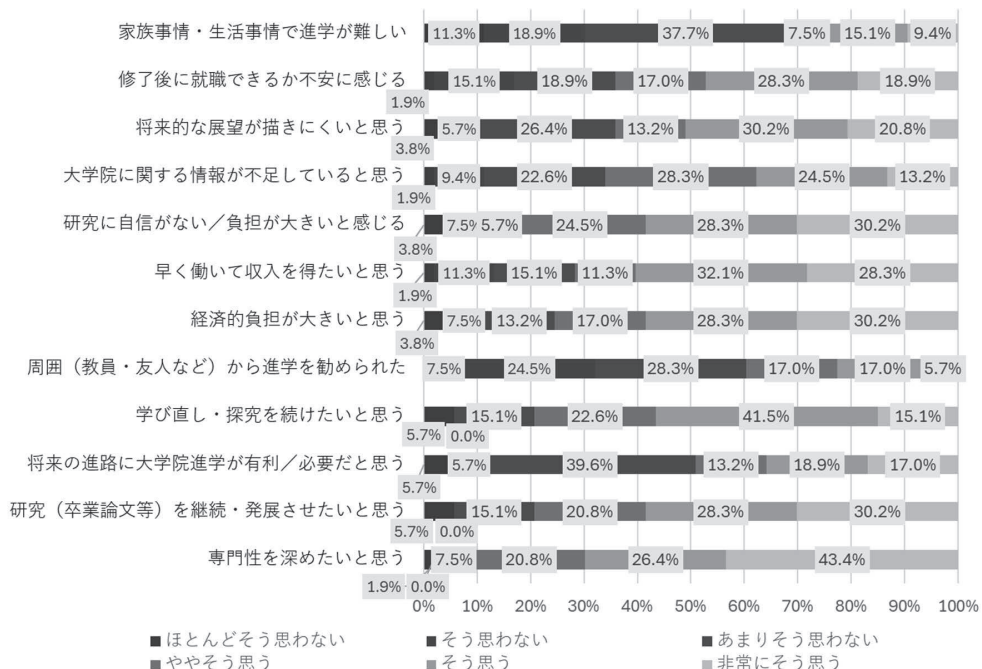


Figure3 大学院進学に対する認識 (全サンプル)

Q8では、本研究科に対する印象を尋ねた。「ややそう思う」以上のポジティブな回答の割合の高い項目を見てみると「学部からの継続性」が 100.0%、「自分の関心領域に合う教員・研究室がある」94.3%、「学修・研究環境(設備、実習先、ネットワーク等)が良いと思う」90.6%と継続的な指導、学修環境が整っている印象が強いようであった。一方、「カリキュラム(授業内容)が魅力的だ」は 79.2%、「研究指導が充実していそう」は 67.9%であった (Figure4)。

Q9で、現時点での卒業後の進路を尋ねたところ民間企業就職が 24 名、本研究科への進学が 12 名¹⁾、他研究科、他大学院への進学が 2 名、公務員が 11 名であった (Figure5)。

さらにこの結果に基づき、内部進学者(12名)、他院進学者(2名)、非進学者(39名)に分けて質問を行った。

内部進学者を対象に、本研究科への進学を決定した理由について尋ねたところ、個々

¹⁾ なお、調査開始時には大学院第 2 期試験は終了しておらずあくまでも「見込み含む」である。

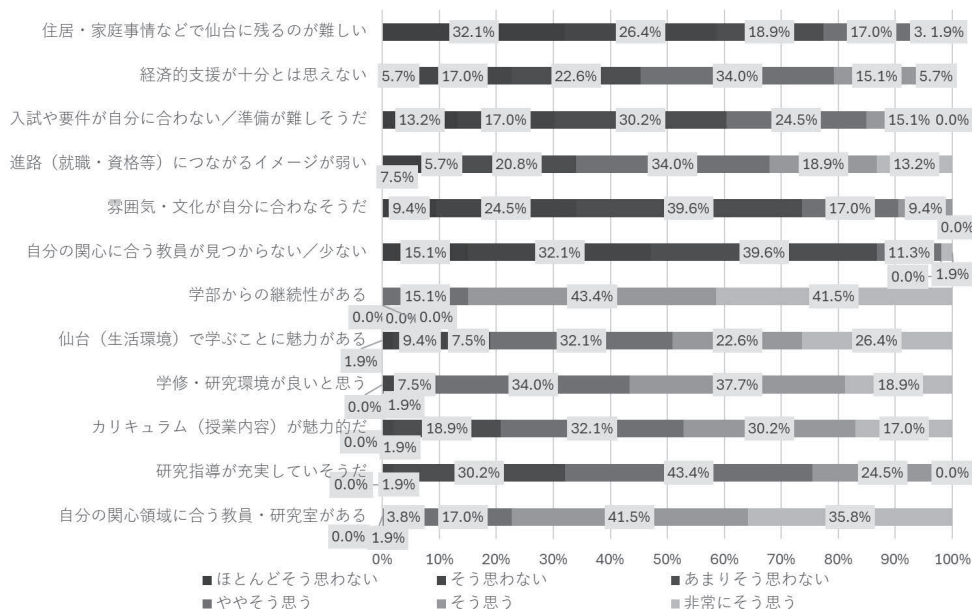


Figure4 本研究科に対する印象

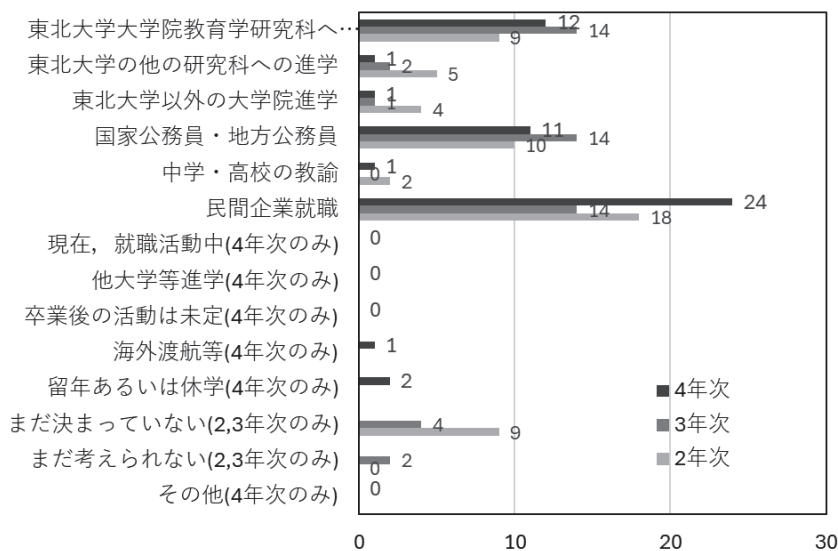


Figure5 調査時点での卒業後の進路

の項目に「あてはまる」方向にと回答した（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」に回答した）割合は、「自分の関心領域に合う教員・研究室がある」「学部からの継続性がある（安心して学べそう／やりやすい）」で 100%であり、次いで、「研究指導が充実していそうだ」「カリキュラム（授業内容）が魅力的だ」の 83.3%であった。「大学院生の先輩たちが楽しそうだ」は意見が分かれる結果であった（Figure6）。

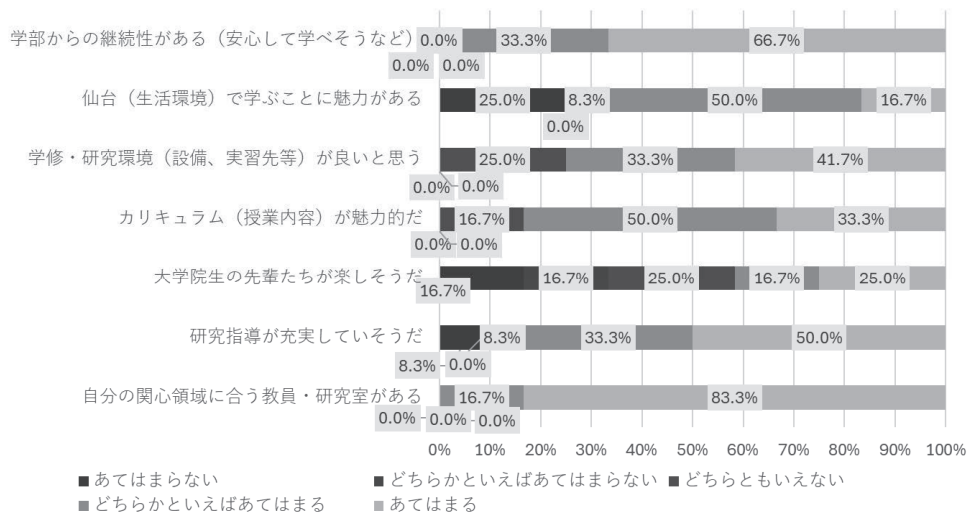


Figure6 内部進学者の進学理由

さらに、内部進学についての「迷い」について尋ねた項目であてはまる方向の回答で高かったのは、「進路 (就職・資格等) につながるイメージが弱い」「経済的支援が十分とは思えない」がともに 25.0%であり、全体的あまり迷いは大きくなかったようであった (Figure7)。

他院進学者について結果を概観してみると、他研究科・大学院への進学理由は、本研究科に不満や不安があるわけではなく、自身の研究テーマにより近い教員や指導を求めての選択であることが示されていた (図省略)。

非進学者に対しては、大学院に進学しない理由を尋ねた。あてはまる方向に割合が高かった項目は、「研究に自信がない/負担が大きいと感じる」79.5%、「早く働いて収入を得たい」71.8%であり、極端に高いわけではなかった。むしろ、「そもそも最初

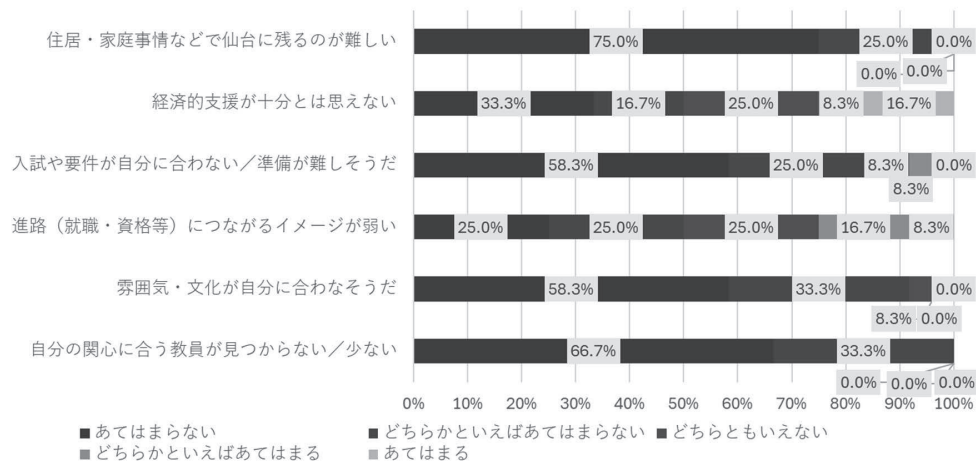


Figure7 内部進学者の進学に対する迷い

から進学という選択肢を考慮したことがなかった」に対して、あてはまらない方向で回答したものが 53.8%あり、それなりに進学を検討しながら、最終的に選択しなかったことがうかがえた。なお進学しない理由については、自由記述に回答したものが 3 名おり、それぞれ「実力不足」「心理系の職業の給与やキャリアへの不安」「勉強したくない」と書かれていた（Figure8）。

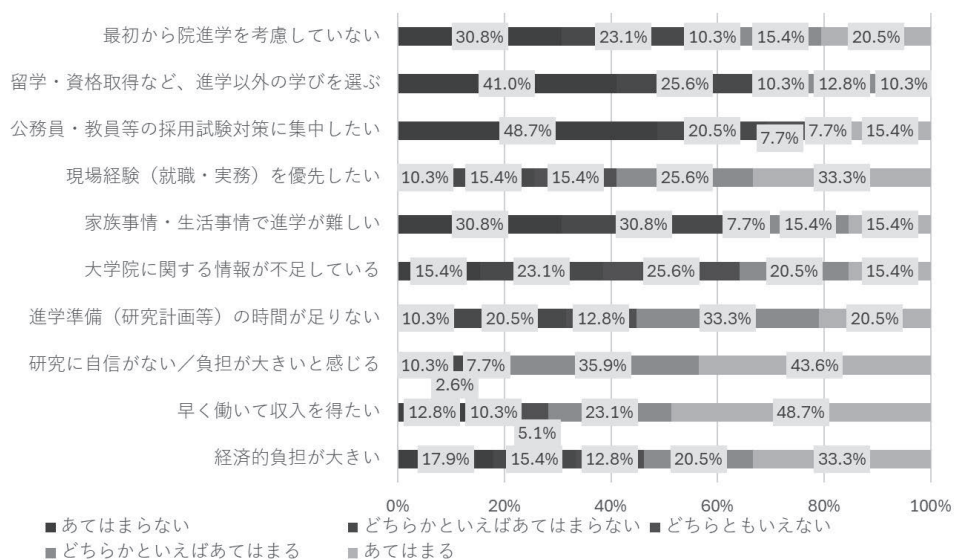


Figure8 非進学者の大学院進学しない理由

さらに、非進学者に対して、将来的に大学院に進学する可能性について尋ねたところ、39 名中「非常に高い」が 3 名(7.7%)、「どちらかといえば高い」が 8 名(20.5%)であり、非進学者のうち 1/4 を超える者が、将来的に進学する可能性があると感じていた。そこで、この 11 名に将来的な進学のための条件について尋ねたところ、全体的に「あてはまる」方向でと回答した傾向が高く、どのような条件も整うに越したことはない思いがうかがえた。中でもあてはまる回答が高かったのは「進学後のキャリア（就職・資格等）の見通しが立つ」（72.7%）「経済的支援（奨学金、授業料免除、TA/RA 等）が得られる」（63.6%）であった（Figure9）。

Q17,Q18 では、東北大学での学生生活の満足度と、現時点での東北大学教育学部での学びの満足度について尋ねた（Figure10,11）。これらの質問についても参考までに 2,3 年次のデータ(N=57,51)²⁾を併記しているが、個票は必ずしも対応していない。東北大学背の学生生活（Q17）については、「大変満足している(5)」と「4」で 2,3 年次でいずれも 82%ほどであったが、4 年次で 90.6%と増加している。また、教育学部で

²⁾ 神谷ほか(2024)で報告した 2 年次みのデータサンプルによる。

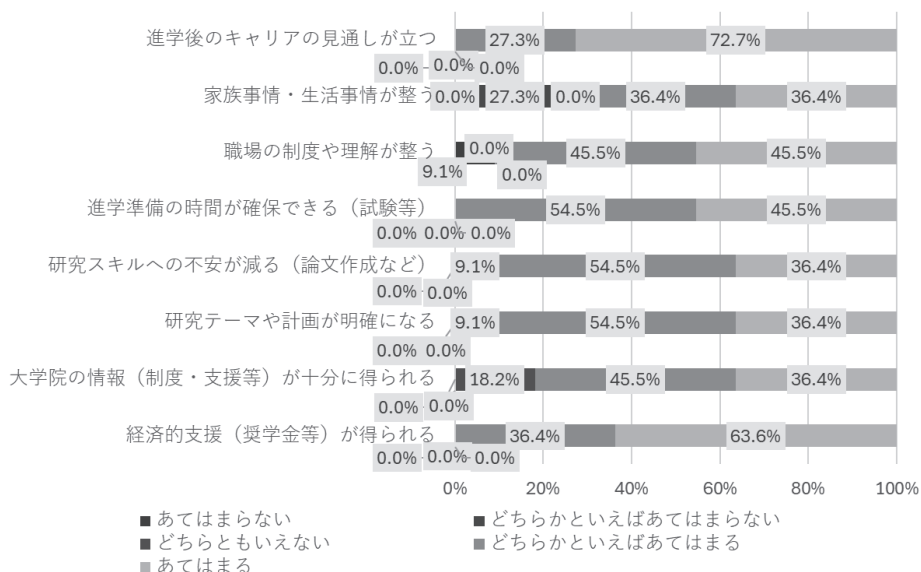


Figure9 将来的な大学院進学条件（進学可能性ある非進学者n=11）

の学びの満足度についても、「大変満足している(5)」と「4」を合わせて 2 年次では 77.2%であったのが、3 年次では 82.3%，4 年次で 84.9%と増加傾向にある。「2」を選択した者も 2 年次で 5.3%であったのが、3 年次では 11.8%と増加していたが、4 年次で 3.8%まで減少しており、全体的に満足度が上昇していることがうかがえる。ただし、4 年次末の学部の締めめの段階での調査であり、満足度の高いものの回答に偏っている可能性も十分考えられる。

最後に、将来の夢を自由に書き込んでもらった。主だったものを抜粋して付録 (Appendix1) に示す。

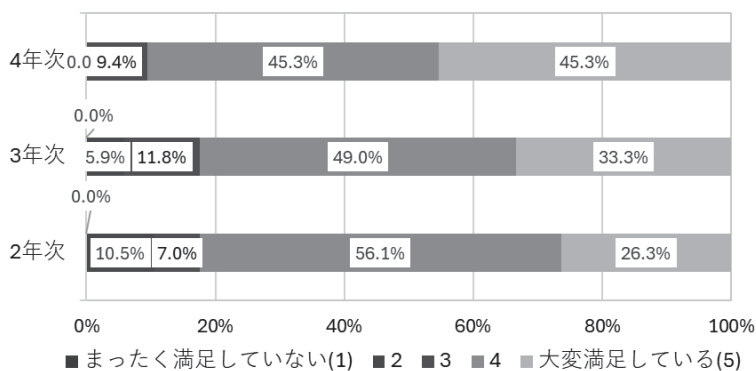


Figure10 各時点での東北大学での学生生活満足度

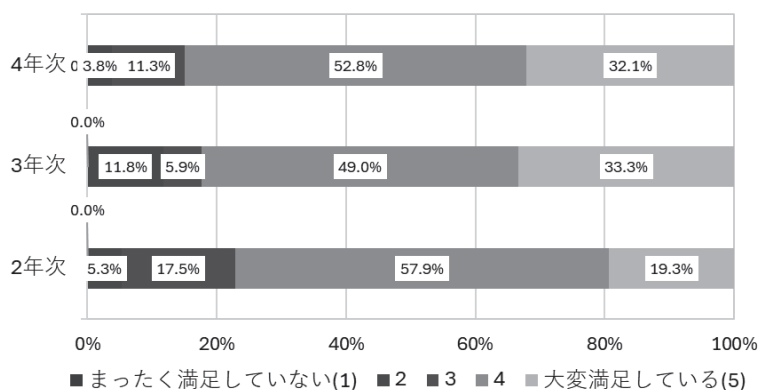


Figure11 各時点での教育学部での学びの満足度

【まとめ】

本報告では、2022 年度より開始された新カリキュラムについて、2022 年度入学の 1 期生（2025 年度の 4 年生）を対象に、卒業を控えた時点での進路決定状況を中心に検討することを目的とした。主な結果として、研究室への所属感は 5 項目中 3 項目で 90% 以上が「そう思う」方向で回答しており、学生生活を振り返ったときの気分ならびに春からの進路を考えた時の気分も前年度に比してポジティブな方向に変化していた。在学中の検討した進路については、大学院進学、公務員（教員含む）、民間就職が概ね 1/3 ずつと、本学部の進路実績と概ね同じであったが、調査時点での進路決定状況(Q9)については、大学院進学が 14 名、その内、本研究科が 12 名、公務員が 11 名、民間企業就職が 24 名と民間企業就職が多いようであった。

在学中に行った進路決定に関する活動としては、民間企業就職が多いことから、セミナーやインターンなどのいわゆる「就活」に関する項目の頻度が高かった。今後、検討した進路との関連で詳細にみていくことが求められる。

すべての学生を対象に、大学院進学に対する認識を尋ねたところ、「専門性を高めたいと思う」「研究（卒業論文等）を継続・発展させたい」といった思いを抱いているものが多い一方、「研究に自信がない／負担が大きいくと感じる」や、経済的負担や機会費用についての認識も高く、進学へのハードルを高いと認識している面もあることが示された。また、本研究科に対する印象も概ね好印象であり、中でも継続的な指導、学修環境が整っている印象が強いようであった。

さらに、内部進学者、他院進学者、非進学者に分けて分析したところ、内部進学者は自身の関心領域にある教員・研究室があり、学部からの継続性があることを進学理由として高く認識しており、迷いについては、最も高い「経済的支援が十分ではない」があてはまらない方向で 25% 程度であり、それほど大きな迷いを抱えている様子は伺えなかった。他院進学者は人数が少なかったが、概ねより自身の専門性や研究テーマ

の近い進路を選択しているようであった。非進学者に進学しない理由を尋ねたところ、「研究に自信がない／負担が大きいと感ずる」、「早く働いて収入を得たい」が相対的に高かったものの、それなりに進学を検討しながら、最終的に選択しなかったことがうかがえていた。また、非進学者のうち 1/4 を超える者が将来的に大学院に進学する可能性を認識しており、その条件として、「進学後のキャリア（就職・資格等）の見通しが立つ」ことや、「経済的支援（奨学金、授業料免除、TA/RA 等）が得られる」を挙げていた。

東北大学での学生生活の満足度と、現時点での東北大学教育学部での学びの満足度について尋ねた結果では、最終学年で多くが卒業を控えていることもあり、前年度までに比べて満足度が高くなっていることが示された。

以上、雑駁ではあるが 2022 年度入学生を対象とした新カリキュラム調査の結果を報告した。繰り返して述べているように各年次のデータに対応はなく、結果の解釈にはかなりの限界があるため、今後データの対応づけを行うことで精緻な分析を進めていく必要がある。また、本カリキュラムの主旨として、大学院への内部進学者の増加を意図していたところであるが、本報告の実数（内部進学者 12 名）を見る限り、特段の増加が見られているとも思われぬ結果であった。ただ、一方で、最終的には大学院に進学しない進路を選んだとしても在学中に進学を検討したことがある者は少なくないこと、進路選択は在学 4 年間の間に多様な選択肢の中から吟味された結果として行われていること、さらに非進学者でも 25% 超が将来的には大学院に進学する可能性があることが示された。今後は、こうした思いを抱く者たちの 4 年間のトラジェクトリを詳らかにしていくことが求められる。

【謝辞】

2021 年度の学部カリキュラム改革ワーキング・グループのメンバー、令和 3、4 年度の教務委員会委員、2021 年度以降のすべての教務係のみなさま、ならびに、なによりも 4 回にわたる調査にご回答いただいた、新カリキュラム 1 期生の C2 生のみなさまに深甚の感謝申し上げますとともに、進路にかかわらず、実り多きライフキャリアと生涯発達を歩まれますことを祈念致します。

【付記】

本報告は、2025 年度東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター 2025 年度「プロジェクト研究（企画研究）」課題名「2022 年度教育学部新カリキュラムに対する学生意識調査 ―4 年次卒業時の進路と学生生活の振り返りを中心に―」（研究代表者：神谷哲司、研究組織：小嶋秀樹・甲斐健人・佐藤克美・後藤武俊・熊谷龍一、申請額申請額：¥248,720）として実施されたものの一部である。なお、本研究に関す

る利益相反はない。

【文献】

- 神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・小嶋秀樹・野口和人（2023）. 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第 1 報）－1 年次学部専門科目の履修とコース決定を終えて－. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 23, 1-11.
- 神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・若島孔文・小嶋秀樹・野口和人（2024）. 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第 2 報）－2 年次末の指導教員決定に向けて－. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 24, 1-18.
- 神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・若島孔文・甲斐健人・小嶋秀樹（2025）. 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第 3 報）－3 年次末の進路決定状況についての速報－. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 25, 1-10.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人.（2000）. 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71（3）, 241-246.

【付録】

Appendix1 卒業時に記された「将来の夢」（一部抜粋）

自分を大切にしながら、社会全体を考えられる人
大学卒業を目前にしてなお将来の夢というのを思い描けず、この先どうなるのか全く想像し得ないです。思い返せば大学受験も就職活動も特にこれになりたい、これをしたというものがぼんやりしたままなんとなくでここまで来てしまいました。ただ、心理学に興味があったのは事実ですし、もっとそれに関する知識を深めたい、研究をしたいと今でも思っています。一度大学院進学も考えましたが、研究を行うことと生活をするためのお金を稼ぐ仕事が上手く結び付かず、研究の道を選んでなお私は生きていけるのかという漠然とした不安があり、さらに金銭的な面からも厳しく、いずれ就職するならば学部卒で働いた方が良いのではないかと就職の道を選びました。将来の夢など大層な名目には当てはまらない小さな未来への願いではありますが、就職して研究はできずとも書籍や論文等を通じて個人的に心理学を学び続けたいと思いますし、今よりもっと自由とお金を手に入れた未来で、いつかもし研究の道に進むことができる扉が開かれたらその扉をくぐりたいと思います。
「あなたがいたから頑張れました」と言われるような人になる。母校で講演をする。
まあ悪くないと思える生活をしたい
圧倒的成長しつつ、バリュープロポジションができ、周りや社会により良い影響を与えられる、人や社会に役に立つと思われる、物事に価値を見出して世界を彩っているような、自分自身も人や社会もワクワクさせられるような強い社会人になりたい。どのような状況でも困難に立ち向かえる、困難を乗り越えるように、自身の能力やスキルを多角的に伸ばしつつ、自分の強みを見つけ伸ばし、そして、常に自分が刻一刻と変化する状況においてどういう立場からどのような貢献が組織や

<p>社会に対してできるのかを考え、実行できるようになれるくらい、自分自身に価値があると感じられるくらい圧倒的成長したい、強くなりたい。</p>
<p>システムエンジニア</p>
<p>華やかな人生を送る事です。きらきら笑顔いっぱいの女性になることです。誰から見ても幸せそうな、家庭を築くことです。</p>
<p>具体的な夢はないかもしれない。今は就職先で精一杯がんばりたい。あまり積極的・意欲的な人間ではないが、何かしらの楽しみをもち、生き生きとした人生を送りたい。</p>
<p>現在はデータサイエンスに興味をもっていて、それを活かせる職に就きたいなとなんとなく思っています。</p>
<p>後悔のないように、探究したいことを探究し尽くす。自分の中にある「なぜ?」「どうして?」を解消しつつ、解消することで生まれるメリットを社会貢献につなげたい。誰もが「思ったよりも割と生きやすい」「案外自分良いかも」と思える社会を作りたい。迷惑かけずにぼっくり最期を迎えたい</p>
<p>今は学修生活以外にある私募ファンドのマネージャーを務めているので、教育学に関心があるのは確かなことだが、キャリアに心配して、今後は金融業界に進行するかもしれない。いずれ自分の私募ファンドを作りたいと思う。</p>
<p>困っている人の支えになれるお仕事がしたい。誰かに笑顔を届けられたらいいなと思っている。</p>
<p>私は将来は人の役に立てる人間になりたいです。これまでたくさんの人にお世話になってきたので、その恩返しのために今度は私が人の役に立ちたいです。具体的には、人が人生の岐路に立った時、例えば転職や就職など、その人の人生が最も良くなるよう、本人が最も納得し幸せだと感じれる道に導きたいです。そして、他の誰でもできることではなく私にしかできない価値を提供できるような人材になりたいです。</p>
<p>障害のある方やその家族・周囲の人たちが安心して暮らせる社会の実現に関わりたいです。</p>
<p>卒論を生かして日本の英語教育をより良くしていきたい</p>
<p>大学院に進み研究するなかで、どうしてもこれがやりたいという強い興味を抱けるトピックがあれば大学教員を目指したいが、そうでなければ民間の研究员になりたい。</p>
<p>地方教育行政に携わりたいと考えています。 実際の進路は必ずしも教育分野に直接関わるものではありませんが、キャリアを積んで将来的にはGIGA スクール構想の推進をはじめ地方教育行政に関する業務を担いたいと考えています。</p>
<p>地方公務員として仙台市の発展に貢献したいです。</p>
<p>中学校の教員です。留年にする事になり、多くの人に迷惑をかけてしまいました。その分意義のある一年にして、教員としての知識、資質を高めていきたいです</p>
<p>普通の家庭を築いて普通に幸せに生きること。</p>
<p>夢とは少し離れますが、悩みやつらいことがあってもなんとか生きていられる社会になってほしいと思います。そのために、苦しいときに頼れる場所を作りたいです。</p>
<p>抽象的ですが、大きな夢としては、どの職業に就くかにかかわらず、自分の経験や知識を生かして人の役に立てる存在になりたいと考えています。もう少し具体的には、研究者として、既存の研究を発展させたり組み合わせたりしながら、新たな知見を生み出す存在になりたいという夢があります。これまで様々な教育学部の講義を受けて、既知の事実を学ぶだけというよりも、それらを踏まえて新たな仮説を立てて検証し成果を得る過程が楽しくもっと続けたいと思うようになりました。将来は、そのようにして得られた研究成果を、実際の教育現場や社会に役立てられる研究者を目指したいです。</p>
<p>笑って死ねれば</p>

Bon voyage!